故事成語(2)

――人生への教訓――

年　組　氏名〔　　〕

「故事成語」には、昔からの人々の知恵が生きています。したがって、わたしたちが世の中で生活していくうえで、とても参考になる教訓を含んだ言葉が少なくありません。

わたしたちはよく、他人と自分とを比較することによって、自分自身のあり方について考えることがあります。「人のふり見てわがふり直せ」などとも言いますが、「故事成語」の中から、そうしたことを表現した言葉を探してみると、「他山（たざん）の石」があげられます。

よその山からとれた質の悪い石でも、砥石（といし）として使えば自分の玉をみがくのに役立てることができるということから、他人の誤った言行や失敗も自分の修養の助けにすることができるというのです。「他山の石」は、自分の石（つまり自分の知徳）をみがくのに役に立つ他の山の石（つまり他の人の言動のこと）を指しています。

注意が必要なのは、自分の修養の助けとなる、人の誤った言行を「他山の石」というのであって、他人のよい例を引き合いに出して「他山の石としたい」などとは言わない点です。

わたしたちはよく「○○さんを見習いなさい。」という言葉を耳にします。これは、○○さんのすぐれたところに学びなさいという意味です。ところが、昔の人は「他山の石」と言って、他の人のまちがった行いや失敗からも多くのことを学ぶように教えています。みなさんは、このようなことを考えた昔の人についてどう考えますか。

「他山の石」と「○○さんを見習いなさい。」という表現とを比較して考えるということは、実は、古い時代の人々の考え方に触れるとともに、現代を生きる人々の考え方についても考えることになっているのです。二つを比べて考えたことで得られた答えについては、それぞれの人の判断にまかせたいと思いますが、「故事成語」には、今、みなさんが試みようとしたことを、まさに表現した言葉もあるのです。

それは、「温故知新（おんこちしん）」「故（ふる）きを温(あたた)めて新しきを知る」という言葉です。過去の事柄や昔の人のすぐれた思想などを研究して、それをもとに現実の問題について考え、新しい道理や知識を発見するという意味の言葉です。わたしたちが歴史を学んだり、いろいろな本を読んで物事を考えたりすることも、「温故知新」の一つなのだと考えられます。

では、わたしたちの生き方に貴重な知恵をたくさん授けてくれる「故事成語」について整理していくことにしましょう。しかし、「故事成語」はあまりに多くてどこから手をつけていいのかわかりません。そんなときに、参考になるのが、この言葉。

「まず隗（かい）より始めよ」

（偉大な計画も最初はまず手近なところから着手しなさいという教え。また、人にあれこれ言う前に、言い出した人からまず実行に移しなさいという教え。）

そうです。「千里の行（こう）も足下（そっか）より始まる」（千里の道も足もとの第一歩から始まる）のですから、まずは、代表的な「故事成語」の意味を覚えることから始めましょう。そして、いつか機会をつかまえて使ってみてはどうでしょうか。

鶏口（けいこう）となるも牛後となるなかれ

鶏（にわとり）の頭になっても、牛の尻（しり）にはなるなということで、大きな集団の中で人に従っていくよりも、小さな集団でもいいからその中で長になれという教え。

虎穴（こけつ）に入らずんば虎子（こじ）を得ず

虎（とら）の住む洞穴（ほらあな）に入らなければ、虎の子をとらえることはできないということから、思い切って冒険をしなければ大きな成果はあげられないことのたとえ。

百里を行くものは九十を半ばとす

百里の道のりを歩こうとする人は、九十里まで歩いても、まだ半分だと考えて、残りの十里を進んだ方がいいということから、物事は、終わりのわずかなところがいちばん難しいので、九分どおり仕上がっても、まだ半分だと考えてちょうどよい、という心構えのたとえ。

先んずれば人を制す

人より先に事を行えば、人をおさえることができ、何事にも後手に回ってはいけないということ。「機先を制する」「先手を打つ（取る）」「先制攻撃」なども同じ意味で使われる。

千丈（せんじょう）の堤（つつみ）もろうぎの穴（けつ）をもって潰（つい）ゆ

「ろうぎ」は「螻蟻」で、螻は「おけら」、蟻は「あり」。どちらも土に小さな穴を掘って住んでいる昆虫。千丈の堤とは、たとえばダムの堤とか、大河の堤防とか、よほどのことでもくずれないもの。そんな堅固な堤でも、おけらやありのちっぽけな穴がもとでくずれるということから、ささいなことが大事を引き起こすので、物事は慎重のうえにも慎重に、ということのたとえ。「蟻の穴から堤がくずれる」ともいう。

瓜田（かでん）に履（くつ）をいれず

瓜（うり）の畑で、はき物が脱げても、かがみこんではき直すようなことはするな、そんなことをすると、瓜を盗むのかと人に疑われてしまうということから、人に疑われるような紛らわしいことはするなという教え。

五十歩を以って百歩を笑う

戦場で、五十歩逃げた者が、百歩逃げた者を臆病（おくびょう）だと笑ったことから、たいして変わりのないこと、たいしたことはないということ。五十歩百歩ともいう。